

2024年9月15日聖霊降臨後第17主日説教

イザヤ書50章4-9節

ヤコブの手紙2章1-5、8-10、14-18節

マルコによる福音書8章27-38節

9月も中旬となりましたが、まだ日中は真夏日が続いています。どうぞ、体調にお気を付けください。本日は、子どもとともにささげる聖餐式です。また礼拝後は敬老の集いを持ちます。主なる神様の恵みに満ちたひと時を過ごしたいと思えます。

本日の旧約日課イザヤ書の50章4節から11節（聖書日課は9節までですが）は、『聖書』には「主の僕の服従」という小見出しが付いています。「主の僕」という人物は、歴史的に誰であるか特定するのは難しいのですが、極めて重要な存在です。イザヤ書において、主なる神様に対する模範的な信仰を示し、背いてしまったイスラエルを導き、また贖う存在としても描かれます。わたしたちの主、イエス様の原型ともいえる人物です。

さて、「主の僕」が誰であるかを特定するのは難しいと述べましたが、「聖書協会共同訳」のスタディ注を見ますと、「この言葉を書いた預言者とされる」とあります。確かに、4節の「**主なる神は、弟子としての舌を私に与えた、疲れた者を言葉で励ますすべを学べるように**」は、預言者の召命の記述のように思えます。預言者といっても、そのままイザヤ書の著者と同一視することはできませんが、主なる神様の言葉を預かっている人ですから、預言者といえるでしょう。しかし、他方で、この「主の僕」について、より一層、歴史的出来事と人物と重ね合わせる解釈もあります。出来事とはバビロン捕囚、人物とはゼルバベルです（前の北関東教区主教様の教名ですね）。

ゼルバベルは、バビロン捕囚からの帰還の時のユダヤ人たちの指導者でした。ゼルバベルは、主の僕として、自分にかかる非難中傷を耐えて、主なる神様が示される通りにその助けを語り、民を指導しました。そのように考えますと、6節の「**打とうとする者には背中を差し出しひげを抜こうとする者には頬を差し出した。辱めと唾から私は顔を隠さなかった**」は、王国滅亡を経験して、主なる神様から離れてしまった同胞からの、ひどい仕打ちを表現しているのかもしれませんが。そう考えますと、「主の僕の服従」という小見出しがありますが、主なる神様との関係においては、「服従」ですが、同胞との関わりにおいては、「忍耐」ともいえるような状況であったのでしょうか。

「主の僕」である人が、そのように忍耐するのは、主なる神様への信頼、まさに信仰があるからです。それは7節の「**主なる神が私を助けてくださる。それゆえ、私は恥を受けることはない。それゆえ、私は顔を火打ち石のようにし、辱められないと知っている**」や、9節の「**見よ、主なる神が私を助けてくださる。誰が私を罪に定められよう**」に明確に表れています。「主の僕」である人は、そのような信頼があるから、様々な屈辱に耐えて、主なる神様の声を語ることができたのです。もし、ゼルバベルであるとするならば、バビロン捕囚という大きな

民族的混乱があったとしても、主なる神様への信頼があるからこそ、ユダヤの人々を導くことができたのです。

聖書日課は、9節までですが、10～11節には、「あなたがたのうち、誰が、主を畏れ、その僕の声に聞き従うのか。明かりを持たずに闇を歩くときでも、主の名に信頼し、自分の神を支えとする者だ。見よ、あなたがたは皆、火をともし、松明で身を守る者。あなたがたの火の光によってあなたがたが燃やす松明を持って歩くがよい。私の手によってこのことはあなたがたの身に起こり、あなたがたは苦痛のうちに倒れ伏すであろう」とあります。こちらは、「誰が、主を畏れ、その僕の声に聞き従うのか」と少し口調が変わります。それゆえ、ゼルバベルではなく、支配した民族の宗教に寛容であったペルシア王ダリウスではないかと特定する場合があります。

バビロン捕囚を終わらせたのは、ペルシア王キュロスですが、ペルシア王ダリウスは、ペルシア帝国の法と正義を実行する人物でした。古代ギリシアへの征服行為であるペルシア戦争のために、マイナスの評価がありますが、ここでは、かつて「創世記」において異教の王であるメルキゼデグがアブラハムに祝福を与えたように、自分の支配下にある民に主なる神様の救いを語っているのです。つまり、異国・異教の王が、主なる神様から離れたユダヤの民を叱り、主なる神様にこそ希望があることを語っているのです。『聖書』の主なる神様は、イスラエルの神ですが、その枠組みを超えていることがわかります。

さて、イザヤ書に記されている「主の僕」はイエス様の原型と述べましたが、イエス様は、「主の僕」の在り方を超えています。イエス様も「主の僕」と同じように、主なる神様に信頼を持ち、従順であり、忍耐されたのですが、イエス様に与えられた報いは、十字架の死でしかなかったからです。イザヤ書53章に描かれている「主の僕」は、イエス様と同じといえますが、イエス様のその死は、より明確な希望を示しました。それは復活です。もちろん、それは事務的手順の結果ではなく、主なる神様による恵みであり、まさに信じるしかない事柄です。しかし、人間にとっても大きな絶望である死が、信仰によって終わりではないことが示されたのです。

今週末21日に、わたしたちの教会では、逝去者記念聖餐式を行います。11月は教区の逝去者記念の礼拝があり、毎月行っている教会もあります。わたしたちの教会では、年に一度この9月です。逝去者記念の礼拝は、すでに天国におられる方々を思い起こすと同時に、そのお一人おひとりに、主なる神様が、イエス様を通して向き合ってくださいていることを確認する時です。それは、どのような亡くなり方をされたとしても、言い換えれば、どのような生き方をされたとしても、主なる神様がそのお一人おひとりを尊いものとしてくださっていることを確認する日です。そして、亡くなられた方を思い起こすことを通して、今生きているわたしたちが、主なる神様とのかかわりを、あらためて大切にする日です。教会のすべての礼拝は、このことと関わっています。主なる神様とのかかわりがあるからこそ、わたしたちが生きている意味が与えられる。だからこそ、何があっても希望がある。これからもそのこと礼拝を通して、確認し続けたいと思います。